天　　気　　1986年1月
Vol. 33, No. 1

巻頭言

—1986年の新年にあたって—

理事長　山元龍三郎

1980年代の前半が終わり後半の1年目を迎えるに当たって，日本気象学会の会員諸兄に新年のご挨拶をお届けします．我々の日本気象学会は，1980年代の前半に創立100周年を迎え，一層の発展を期して第2世紀を迎えました．学会の発展には，機関誌の充実・国際学術交流の振興などの学会活動の活発化と共に，会員数の増加や財政基盤の確立など地道な努力が不可欠であります．

一昨年，当学会代表団が中国気象学会の創立60周年記念式典を機に中国を訪問しましたが，昨年には章基嘉教授をはじめとする5名の中国気象学会の代表団を我が国へ迎える事が出来ました．同代表団が，東京とその周辺および北海道・中部・関西の各支部を訪問されて，我が国の気象関係者と友好を深められた事は大変喜ばしい次第です．限られた日程のために，東北・九州・沖縄支部を訪問して頂けなかった事は残念でしたが，これを契機に両国の気象関係者の交流が今後益々盛んになる事が期待されます．

今年の4月に，長期予報開始100年を記念して，インド気象学会の主催の長期予報に関する国際セミナーが開かれます．日本気象学会は，インド気象学会の要請により，イギリス王立気象学会および米国気象学会と共に後援する事を決めています．そして，そのセミナーで基調報告をする2名の専門家を派遣してほしいとの要請に応えて，2名の会員の派遣を予定しています．また，今年の8月には東京で，世界気象機関（WMO）および国際測地・地球物理学連合（IUGG）主催の短期・中期数値予報国際シンポジウムが開かれます．数値予報に関する国際会議が我が国で開かれるのは十数年ぶりであり，実りの多いシンポジウムとなる事が期待されています．日本気象学会はこのシンポジウムを後援すると共に，そのプロシーディングスの発行を引き受ける事を決めています．

我々の気象学会がこのように国際的に重要な役割を演ずるようになってきたのは，会員諸兄の研究・技術開発の業績が国際的にも高く評価されているためである事は勿論ですが，学会の機関誌が質的にも量的にも充実しているためでもあります．しかし，極めて範囲の広い気象学の全体を見渡した時，まだまだ裾野を拡げそして強化する必要を痛感します．これは，会員数の増加や機関誌を更に拡充するように努力する事とも関連していて，今年度の課題であります．特に応用気象の分野での研究・調査が，各方面で相当精力的に行われているにもかかわらず，学会活動の面では充分ではないように見受けられます．アカデミックな研究・調査の重要性は申すまでもない事ですが，我々の学会における応用気象の分野の位置を高める必要を痛感しています．